

Joy の声 (第 6 回)

上 里 涼 子

青森県立あすなろ療育福祉センター 整形外科

この度、Joyの声のバトンを頂き、手外科女性医師の立場から、発信する機会をいただきありがとうございます。自己紹介を交えながら、私の手外科の経歴をご紹介します。

青森の魅力

生まれも育ちも沖縄の私は、雪国の生活を体験してみたいという不謹慎な理由で、弘前大学医学部に入学することになりました。医学部6年間の期間限定で雪国を体験し、2001年に医学部を卒業後、初期研修は地元沖縄で行いました。しかし、研修が忙しかったこと、弘前大学の整形外科医局の雰囲気に憧れて、整形外科は弘前で学ぼうと思い、2003年に弘前大学整形外科に入局しました。毎年、雪が降る度に、沖縄に帰りたと思っていますが、ここ(青森県)には美味しい食べ物とお酒、魅力的な四季があります。海の幸、山の幸と言いますが、収穫した日にしか味わえない美味しいものがたくさんあり、青森の魅力にとりつかれています。雪は苦手ですが、墨彩画がカラフルなカラー写真に変化するような季節の移り変わりは、毎年ときめきます。春は道端のタンポポでさえ、街を彩ります。気づけば24年の時を青森で過ごし、整形外科専門医、手外科専門医を取得し、夫とめぐり逢い、娘を出産しました。



2016年10月 藤哲先生の慰労会。津軽塗の舟状骨が記念品として配られました。

手外科の魅力

整形外科を選ぶ時、将来は手外科を専攻しようと決めていました。先代の教授である藤哲先生を中心に、弘前大学には「手の外科班」があり、私の手外科医への道しるべとなりました。2年の初期研修後、県内の病院で一般整形外科を学び、学位と整形外科専門医を取得しました。弘前大学の手外科班で手外科研修を開始したのは、卒後11年目の時でした。整形外科は一般的に、大工の様だと言われ、力仕事が多い印象を持たれます。しかし、手外科では軟部組織を扱うことも多く、骨関節を扱ったとしても腕力を問われることは少ないので、女性に向いていると思っています。手術も、着席して行うことが多く、最近では立ったままの長時間手術は苦手になってしまうほどです。患者さんの中には、先天異常の小児も多く、特に子供好きな訳では無かった私も、気付くと子供好きになりました。

手外科医育成の問題

藤哲先生が教授だったころ賑やかだった手外科班は、医師不足とともに縮小され、現在、弘前大学整形外科手外科班には3名の医師が所属しています。3名とも非手外科専門医で、外傷、変性疾患、先天異常、腫瘍切除後の再建手術、他科との再建手術に対応しています。私が手外科専門医を取得する前も非手外科専門医2名という状態になり、認定研修施設維持のため、藤哲先生に毎週指導に来ていただきました。現在は、私が指導するという形で毎週外来や手術に通っております。青森県内の関連病院の整形外科の機能を維持していくことを優先すると、大学の手外科班に人員を集約することが難しいほど医師不足です。手外科専門医の後輩を育成するためには、整形外科を希望する若手を増やす必要があり、男女を問わず勧誘に力を入れているところです。



2017年12月 ケープタウンでのSICOTに参加しました。

仕事と家庭の両立

仕事とプライベートのバランスは人それぞれです。私が医師になったころは、24時間を病院に捧げるような生活をしていました。それはそれで、合宿のようで楽しかった時間です。現在は、「ワークライフバランス」や「働き方改革」が叫ばれています。バランスは、ライフステージごとに変化させても良いと思っており、私は、現在2歳の娘に時間を確保するようにしています。青森の冬は、雪のため通勤に時間がかかるため、朝4時起床、5時半出勤の生活です。娘の朝の身支度、朝食、保育園への送り出し、お迎えを、全てイクメンの夫にやってもらっています。18時に帰宅後は、娘とお風呂、寝る支度をして、娘と一緒に眠りにつきます。夫にはとても感謝しています。働き方の多様性を認め合える職場にするためには、医師数の確保が必要であり、結局のところ、手外科医育成の問題の解決は不可欠と考えています。



2018年5月 セルビアのヨーロッパマイクロサージャリー学会にて。